

教員も「主体的・対話的で深い学び」を

教育監 柿本 章

今年度から始まる高等学校及び特別支援学校高等部を含めて、全校種で新学習指導要領による教育課程が本格実施となりました。改めてではありますが、新学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」などとともに、日々の授業については「主体的・対話的で深い学び」がキーワードとなっています。さらに、昨年1月の中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」においては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がキーワードとなっています。

いずれにおいても、「学び」という言葉が使われているように、これまでは教員が「どのように教えるか」に重きをおいていた考え方を、子どもを主語として「子どもがどのように学んでいるか」を丁寧に見取りながら授業を行うという考え方へ転換することが求められており、ある意味で学校は大きな改革を行っていかねばなりません。そして、こういう時だからこそ教員にも「主体的・対話的で深い学び」が求められていると思います。

子どもたちの学びを意識した授業改善に取り組むには、まず自分の授業で子どもたちの学びがどうなっているのかをしっかりと見つめることが必要です。その上で、もし上手くいっていないとすればその原因を分析し、新たなチャレンジをしていくという姿勢が大切です。

さらに、教員一人一人の授業の質を高めたり授業改善に学校全体で取り組んだりするためには、教員の協働性を高めることが有効であることは言うまでもありません。中学校や高校で聞かれる「教科の壁」を取っ払い、異なる教科の教員がお互いの授業を見合うことも有効でしょう。子どもたちの学びを見取るという観点では、同じ教科の授業を見るよりはむしろ専門外の授業の方が、より子どもの立場で授業を見ることができ授業後の振り返りも多様な視点で行うことができそうです。

各学校では様々な工夫をしながら授業改善に取り組んでおられると思いますが、日頃学校訪問を行っている指導主事等からは、学校全体で共通テーマを設けて授業改善に取り組んでおられる学校やキーマンが中心となって集団で取り組んでおられる学校では、子どもたちの学びが変わってきているとの話を聞きます。これまでも授業改善については学校全体で取り組んでおられると思いますが、新学習指導要領が始まった今、改めてその重要性を理解していただき実践していただくようお願いします。

まず、管理職の皆さんや研究主任、教務主任といったミドルリーダーの皆さんには、職員室で対話が生まれやすい環境づくりに努めていただきたいと思います。そして教員の皆さんには、子どもたちの学びの視点でお互いが学び合う姿勢を持ち続けながら、日々授業改善に主体的に取り組んでいただきたいと思います。

「これからの先行きが不透明な社会を生き抜くには、主体的に課題を見つけ様々な考えをもつ多様な人たちと対話しながら課題を解決しようとする姿勢が大切である。」こういったことを普段子どもたちに話しておられると思いますが、まずは子どもたちを指導しておられる教員の皆さんが、「主体的・対話的で深い学び」を実践しながら授業改善に取り組んでいただき、島根の子どもたちの力をしっかり伸ばしていただきたいと思います。

1 「しまねの学力育成プラン」の3本柱の教育推進

～自ら課題や展望を見だし、粘り強く挑戦し学ぶ人の育成～

令和3年度から、学力を育む観点からの育成したい人間像「自ら課題や展望を見だし、粘り強く挑戦し学ぶ人」の育成を具体的に推進するために策定した「しまねの学力育成推進プラン」に基づき、小中高の系統性・連続性を図りながら、基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせ、人生や社会で生かすことのできる確かな学力と学び続ける意欲を育む教育を推進しています。

令和3年度 of 取組の中から、「令和4年度版授業チェックリスト」をご紹介します。

この授業チェックリストは、令和3年度全国学力・学習状況調査、県学力調査から見えてきた課題に対する授業づくりのポイントを示したものです。授業づくりのポイントを網羅したものではなく、学力調査から見えてきた特に重視していただきたいポイントを載せています。単位時間で全てをチェックするのではなく、授業を振り返る視点に合わせて項目を選んでご活用ください。

【授業づくりのポイント】

- (1) 子どもたちが受け身ではなく、自ら課題を見いだすなど主体的に学習に取り組めるよう、子どもたちの学びの姿をイメージすることや導入でのめあての設定、めあてに沿ったまとめや自分の学びの振り返りをする。
- (2) 話し合い活動の質を高めるために、子どもたちが話し合い活動の目的を意識できるようにする。資料の活用や友達の意見に対して等の条件に即して自分の考えを書き表すことに課題があったことから、話し合った後に自分の考えをしっかりと書き表すことができるようにする。
- (3) 子どもたちが家庭学習に意欲的に取り組めるよう、学習内容を定着させる宿題だけではなく、授業とつながり、学びを広げたり生かしたりできる家庭学習を取り入れる。

令和3年度全国学力・学習状況調査、島根県学力調査からみた
令和4年度版 授業チェックリスト

授業前

☐ 授業者として、本時終了時の子どもたちの姿をイメージしていましたか。
【評価の明確化】
・評価場面とその方法の明確化

☐ 授業者として、家庭学習(宿題・自主学習)とのつながりを考えていましたか。
【家庭学習を見通した授業づくりの意識化】
・家庭学習の内容、授業が終わった後の家庭学習の確認

導入

「なぜ?」「どうして?」「○○を知りたい、調べたい」

☐ 子どもたちは、「なぜ?」「○○を考えたい」といった思いや考えから立てためあてをもとに、1時間の授業の見通しをもちながら学習に取り組んでいましたか。
【子ども目標のめあての設定】・【目指す姿の意識化】
・子どもたちが興味・関心をもつことができる教材(教具等)の提示
・地域の教育資源(ひと・もの・こと)の効果的な活用
・本時の授業のねらいと見通しの確認

展開

考えることは楽しい。仲間と一緒に考えることはもっと楽しい。

☐ 子どもたちは、発問や課題に対して、自分の考えをもち、学習に取り組んでいましたか。【追究意欲の喚起】
・思考をゆさぶる発問
・自分の考えを思いめぐらす時間の確保

☐ 子どもたちは、めあてを意識して、話し合い活動(ペア・小グループ・全体)に取り組み、多面的・多角的に考え、自分の考えを書くことを通して表現していましたか。
【自分の考えの構築の支援】
・必要に応じた「個人・ペア・グループ・一斉」などの学習形態の工夫
・教師のコーディネート力(ねらいに迫るための話し合い活動の調整・支援・まとめ)
・自分の思いや考えを書く活動の設定
・自分の考えを説明する活動の設定
・一人一台端末を含めたICT機器の効果的な活用

終末

わかった! できるようになった! もっとやりたい! 次の授業が楽しみ!

☐ 子どもたちは、めあてに沿ったまとめをし、どんなことを学んだかを自分の言葉で表現しながら授業の振り返りをしていましたか。
【達成感・次時への意欲喚起】
・本時のめあてに対するまとめの確認
・1時間の授業でわかったこと、考えたこと、学び方、思考の変容、もっと知りたいことなどの振り返り(振り返りシート、伝え合いなど)

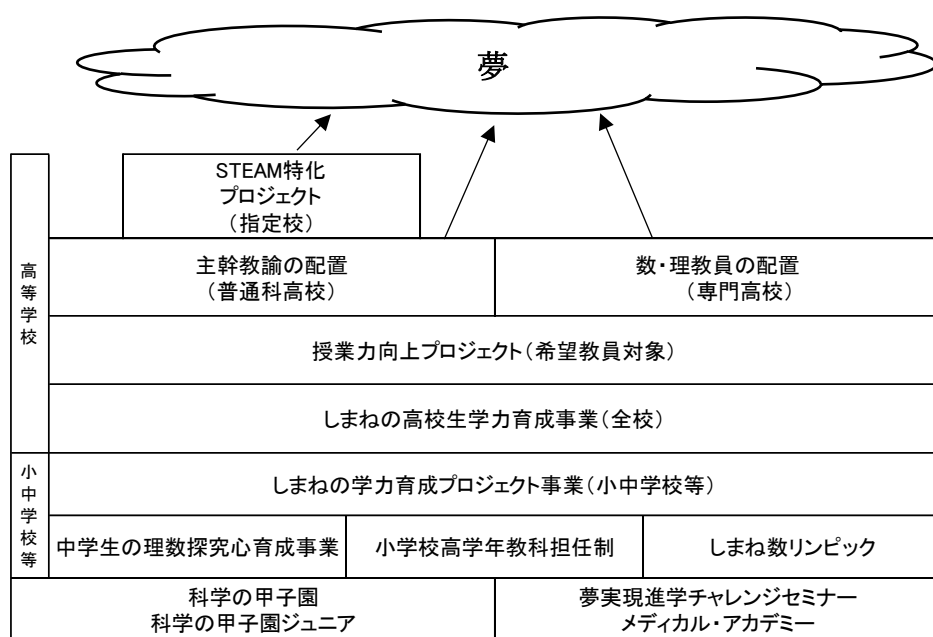
☐ 子どもたちは、授業が終わっても「もっと知りたい、調べたい」という意欲をもっていましたか。【家庭学習への意欲付け】
・本時の学習内容を定着させる家庭学習のための課題の提示
・本時の学習内容を発展させる家庭学習のための課題・ヒント等の提示

※「ねらい」と「めあて」は、それぞれ授業者、子どもの立場で使い分けています。

※子どもたちの姿から授業を見つめ、振り返っていただけるように、導入、展開、終末の部分は、「子どもたちは」を主語にしています。

令和4年度は、これまでの取組に加えて、子どもたちの夢が拡がり、夢を実現できる学力を育成することができるよう「しまねの高校生学力育成事業」「しまねの学力育成プロジェクト事業（小中学校等）」等に取り組んでいきます。

子どもたちが、自分の夢を上げ、学ぶ意欲を高めていくために、高等学校段階で文系でも理系でも希望に応じて選択ができる学力を育成し、将来の選択肢を拡げることができるよう支援していきます。そのために、小中学校段階では、理系分野への意欲・関心を喚起し、確かな学力が育まれるよう支援していきます。



「しまねの高校生学力育成事業」

各県立高等学校が、グランドデザインの実現に向けて、学科の専門性、生徒の状況や地域事情に応じて、生徒の教科学力育成と教員の指導力向上に取り組み、生徒の進路目標達成につなげるため、生徒への教育指導計画や教職員の研修計画等を実践していきます。

「しまねの学力育成プロジェクト事業」（小中学校等）

「しまねの学力育成推進プラン」にある「授業の質の充実」「家庭学習の充実」「地域に関わる学習の充実」を柱とし、子どもたちの将来の選択肢を広げるために理系分野への意欲・関心の喚起を図るなど、所管の小・中学校等において学力育成に向けた市町村教育委員会の取組を支援し、その成果を全県に普及することで、県内小・中学生の学力向上を図っていきます。

「中学生の理数探究心育成事業」

中学生の理数探究心の高揚を図り、高校段階において理系選択が可能な学力と関心が身に付くよう、最新の教育動向を踏まえ理数教科のさらなる充実を図っていきます。

（教科指導リーダー育成研修（R4）、授業力向上研修（R5））

2 幼小連携・接続の推進について

～交流の充実と接続を見通した課程や計画の編成・実施に向けて～

島根県幼児教育センターは、幼児期の子供の育ちと学びを支え、小学校以降の豊かな心や確かな学力などに確実につなげていくことを目的に、平成30年に開設されました。令和2年に島根県幼児教育振興プログラムを策定して、幼児教育のめざす子供像、保育において大切にする視点や幼小連携・接続の基本方針等を明示し幼児教育を推進してきました。

これまでの取組により、幼児教育の質の向上への機運が醸成され、幼児教育施設の意識の高まりが見られるとともに、アドバイザー等を配置する市町村も増えるなど市町村内の幼児教育の質の向上に係る体制も構築されてきました。

しかし、幼小連携・接続については、令和3年度の島根県幼児教育に関わる実態把握調査から、幼児教育施設、小学校ともに65%前後がステップ2「年数回の授業、行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通した課程や計画の編成・実施は行われていない。」状況にあることがわかります。

生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期の子供の成長を、切れ目なく支える観点から、「子供に関わる大人が立場の違いを越えて自分事として連携・協働し、この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育めるようにすること」(幼保小の架け橋プログラムの

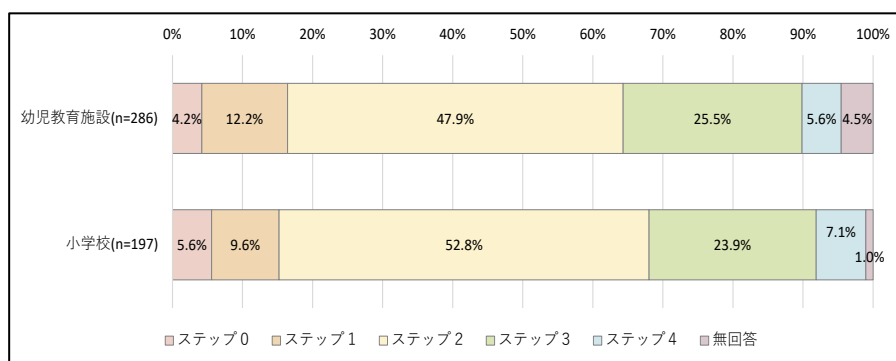
実施に向けての手引き(初版) 令和4

年3月31日 文部科学省)が求められています。次のステップ3「授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した課程や計画の編成・実施が行われている。」以降の段階に向けて、幼児教育で培った資質・能力を連続して育成するための、小学校就学前後のカリキュラム編成とその実施が必要です。

また、保育所や幼稚園などの幼児教育施設の学びと小学校での学びをしっかりとした一つの流れとして取り組み、幼児教育施設と小学校が、子供の姿を軸に相互の教育について理解することが大切であると考えます。

【幼小連携・接続事業 ～研究の成果として～】

昨年度まで幼小接続に関する研究事業を、県内3地域で実施してきました。実践地域の今年度のスタートカリキュラムでの児童の様子について、「入学してまもなくの子供たちが、小学校の先生の名前を覚えていて、名前を呼んで話しかけてくる姿が見られたり、保育園の掲示物を小学校と共有していたりと、幼小連携接続の取組が根付いており、子供たちは楽しそうでのびのびとしている」と聞いています。ここからは、それぞれの地域の取組と研究の成果を紹介します。



ステップ2	年数回の授業、行事、研究会などの交流はあるが、接続を見通した課程や計画の編成・実施は行われていない。
ステップ3	授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した課程や計画の編成・実施が行われている。

令和3年度島根県幼児教育に関わる実態把握調査より

豊川保育園と豊川小学校では、子供の交流を継続して実施し、ねらいをもって改善して次年度につなげるなど、交流の充実が図られました。また、小学校教員が保育を体験したり、小学校の図画工作科の授業を通して保育園と小学校の教員と一緒に学んだりするなど、幼児教育と小学校教育で目指す姿に対する理解を深め、資質能力についての相互理解の機会を設けました。さらに、互いの理解を深めながら見えてきた実態に合わせて接続カリキュラムを改善しました。

斐伊小学校区では、管理職の連携・協働、リーダーシップのもと、全教職員で研究の方向性や取組内容について共通理解を図り、「だれもが担任」という意識で研究に取り組みました。また、小さなことですが、実はとても大きな成果の一つとして、教職員間の「心のハードル（垣根）」が低くなったことが挙げられます。教職員間の関係は、子供の姿に影響し、保護者の安心感・信頼感にもつながりました。本研究では、ここから連携・接続がよい形でスタートし、現在も幼小連携・接続の取組がさらに深まっています。

ごか保育園と五箇小学校では、つきたい力として、コミュニケーション力を共通に掲げ、「聞く・話す・動く」を中心に手だてや活動を資料に整理しました。そして、入学前には保育園での生活の積み重ねについて、入学後には学校生活の様子などについて、子供の姿を中心に語り合い、入学後数週間の1年生の様子をしっかりとみとり、小学校の全教職員で記録・共有しました。つきたい力が明確になっており、皆が同じ視点で語ることができ、共有も深まりました。

各地域において、幼児教育施設と小学校の教職員が相互の教育を理解する取組を進めていくとともに、本研究の成果を研修や取組に反映し、幼小連携・接続がさらに進むことを期待しています。

益田市

豊川保育園
豊川小学校

「つながる」を当たり前

新学習指導要領に基づいた交流の在り方やスタートカリキュラムの検討
子供の交流（サツマイモの苗を植えよう）
教職員の研修
* 小学校教員による保育体験
* 図画工作科の研修

→

接続カリキュラムに反映

○ 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿をベースに培った力が1年生の基盤となり、さらに小学校の学習指導要領で育成を目指す資質・能力の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」そして「学びに向かう力」の獲得につながっていることがわかった。さらに、この繋がりを意識しながら、接続期の活動と一緒にやるからこそ見えてくる姿を共有し、接続カリキュラムに反映させることができた。

○ 令和2年度は、保小交流で小学校に慣れている児童が多く、計画よりも早く学校生活に順応することができた。

「豊川保育園と豊川小学校の保小連携活動 研究のまとめ」より（一部抜粋）

雲南市

斐伊こども園
斐伊保育所
斐伊小学校
(協力) 四ツ葉学園保育所

接続期の子どもを支えるもの

全校体制で取り組む 「心のハードル（精神的な垣根）」
・「だれもが担任」
・管理職の連携・協働（定例管理職会）

小学校や先生方を
身近に感じられるようになった！

職員間の「心のハードル」（見えない壁・垣根）

○ 「心のハードル」が低くなったことで、「斐伊の子」を一緒に育てていこうという雰囲気醸成されました。その結果、子供たちがより安心して遊ぶ姿が見られたり、小学校生活を楽しみに思う気持ちが膨らんだりしました。さらには、幼小が連携している様子や子どもたちの姿を見て、保護者の安心感・信頼感が高まっています。

「令和2年度・3年度幼小連携・接続研究事業 実践報告」より（一部抜粋）

隠岐の島町

ごか保育園
五箇小学校

つながることの先に見えてきたもの

つきたい力を明確にしたカリキュラムの作成
保育園と小学校で共通したつきたい力の明確化
コミュニケーション力「聞く・話す・動く」

同じ視点で子供の育ちを
語ることができる

○ 保小接続カリキュラムをもとに、これまでの育ちをつないでいくことに取り組んだ。「聞く・話す・動く」の力を中心に0からではなく、つけてきた力をのばしていくことを意識することができた。

○ 入学したての子供たちは、新しい生活に楽しみながらも不安な気持ちも持っている。保育園での経験をつなぐことや視覚的な支援、担任を中心とした教職員の関わりなど安心してスタートできる環境が大切である。保小の教職員が意識を共有し、語り合いながら進めていくことの重要性を感じた。

「ごか保育園と五箇小学校の保小連携活動 研究のまとめ」より（一部抜粋）

3 「学校司書等による学びのサポート事業」2年目にあたり ～一人一人の学びに寄り添う「開かれた学びの場」の実現に向けて～

「学校司書等による学びのサポート事業」がスタートして、1年が経過しました。この事業は、「主体的・対話的で深い学びの実現のため、県内公立小・中学校の学校図書館活用教育を推進するとともに、学校図書館を拠点として児童生徒一人一人の学びに寄り添う役割を担う学校司書等を配置する市町村を支援する」（要項より抜粋）という趣旨のもと、これまでの学校司書の業務に加えて個に応じた支援を担う方を「学びのサポーター」と位置付け、配置する市町村に財政支援を行うものです。

〔学びのサポーターの取組内容と成果：R3年度報告書から〕

1 本を介した居場所づくりや人間関係づくり

- ・大人数の中に入りづらい生徒や教室に入りにくい生徒が、静かで整えられた空間でリラックスして本を読んだり、優しく話を聞いてもらったりすることで気持ちを立て直せることが多々あった。
- ・不登校傾向生徒やコミュニケーションが苦手な生徒、自閉症情緒障がいのある生徒等にとって、図書館と学びのサポーターが安心できる居場所やクールダウンの場となり、人間関係づくりの基点となった。

2 個別の学習支援

- ・発達の段階に応じた資料の用意、資料に振り仮名を振る、色分けした付箋を資料に貼る、個の課題に即した資料リストを作成する等の手立てによって、多くの児童が自力で学習に向かえるようになった。
- ・資料を調べてまとめる活動や、レポート、リーフレット、新聞のまとめ方を支援し、個人で調べることが難しい生徒には、一緒に資料の読み直しをしたり、教科担任につないだり、理解しやすい他の資料を準備するなど、個に応じた学習支援を行った。

3 知識や考えを広げる図書の支援

- ・児童個々の興味によって紹介する本を変える工夫をし、年間貸出冊数が6300冊を超え、一人100冊の目標を達成した。
- ・常に図書館にすることで、日頃から生徒たちとコミュニケーションをとることができ、生徒の興味にスポットを当てたマストな本を薦めるサポートができた。

4 ICT機器を活用した学習支援

- ・児童のタブレット操作支援に加え、自らも本に関する動画を作成してICTの有効性を児童に伝えることができた。
- ・タブレット利用に対応したQRコード付きのパスファインダーを作成し、提供することで、著作権に抵触する可能性を軽減し、検索時間の短縮に役立てた。また、タブレットに慣れていない生徒に、個別に検索キーワードの選択方法へのアドバイスをした。

提出いただいた報告書の記述からは、多くのサポーターの方々が、選択した役割を超えて児童生徒の支援にたいへん熱心に取り組んでくださっていることがうかがえました。中には「この事業によって、今まで取り組んできたことが明確に位置づけられた」という捉えも見受けられ、児童生徒と関わる中で担ってきたさまざまな役割を、学びのサポーターの業務として自覚的によりよいものにしていこうというサポーターの方々の意欲を感じました。

また、これまでの学校司書業務の面でも、「貸出冊数平均が年間一人あたり8.8冊→9.9冊に増加し、県学力調査の国語『読むこと』の目標値を大きく上回ることができた。」「授業での図書館の利用回数も増え、学力調査での思考力、判断力、表現力の項目が向上した。」「学校図書館の活用について、サポーター

と相談し助言を受けることでよりよい授業実践につながった。教材研究に時間をかけられない職員への参考資料の提示、蔵書管理や配架、新刊本の紹介など、司書教諭の負担軽減にもつながった。」などの報告があり、サポーターが図書館に常駐することが教職員にもプラスのサポートとなっており、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善や図書館活用教育の推進という面でも効果を上げていることが確認できました。

〔学校図書館活用教育と児童生徒への支援をさらに充実させるために〕

昨年度の報告書からは、上記のような成果とともに、いくつかの課題も浮かび上がってきました。県教委では、3回予定している学びのサポーター研修を通して学校現場を支援していきたいと思いますが、各学校でも、現状と今年度の取組について、以下の視点からチェックしてみてください。

○学びのサポーターの役割と学校図書館の機能についての共通理解

学びのサポーターの方々は、基礎的な司書業務（貸出対応、蔵書管理）、学校司書業務（読書推進活動、授業用資料の準備・提供・授業支援）、新たに加わった学びのサポーターの業務といった多くの役割を担っています。しかし、勤務時間の関係もあって、役割に対する教職員の理解や相互のコミュニケーションが不十分になりやすい傾向があります。図書館を活用した授業実践についても、多くの教科で取り組んでいる学校がある一方で、従来の国語中心の実践にとどまっている学校も見受けられます。

「読書センター」「学習センター」「情報センター」の3機能をもつ学校図書館を学校教育のあらゆる場で活用していくこと、そのために学びのサポーターの役割を理解し密に連携していこうという意識を、管理職や司書教諭・図書館担当教員が中心となり全校で共有することが求められます。

○柔軟な連携と密なコミュニケーション

学びのサポーターの方々に力を十分に発揮していただくためには、役割に応じた柔軟な連携体制を構築し、コミュニケーションを密にしていくことが大切です。学校現場の先生方が毎日忙しく仕事に取り組んでおられることは重々承知していますが、学校図書館を十分に活用していくためには、学びのサポーターの方だけに任せるのではなく、進んで連携・コミュニケーションの時間を作り出していくことが求められます。図書館運営・授業づくりのために司書教諭・図書館担当・授業者との連携時間を確保することはもちろん、例えば居場所づくりや人間関係づくりにおいては学級担任との情報共有に加え、養護教諭や生徒指導・生徒支援担当、特別支援教育コーディネーターやクラスサポートティーチャーなど支援関係のスタッフとの連携が不可欠でしょう。職員会議への学びのサポーターのスポット参加、掲示板・回覧ノート・校内メールを活用した情報共有など、学校の実情に応じたコミュニケーション方法を工夫してください。

○設備活用方法の工夫

限られた時間内でのスムーズな業務遂行には、ハード面の環境整備も欠かせません。また、ICT機器を活用した学習支援のためには、貸出対応・蔵書管理用のスタンドアローンPCだけでなく、ネットワークPC（タブレット）とWi-Fi環境が学校図書館に整備されている必要があります。予算の関係もあり、必ずしも十分とはいえない環境の学校が少なくないと思いますが、ICT活用は教育界全体の潮流であり、今ある設備を上手に利用（例えば、図書館のWi-Fi環境が不十分であれば普通教室にタブレットと図書資料を持ち込んで授業をするなど）していく工夫が求められます。

「学校司書等による学びのサポート事業」も2年目に入りました。昨年度の実践のよい点を受け継ぎながら、各学校の課題に対応した取組を積み重ね、学校図書館における個々の児童生徒に応じた学びや支援がより充実したものとなるように願っています。